



Title	満洲語文語の従属節対格主語の照応機能について
Author(s)	山崎, 雅人
Citation	北方言語研究, 10, 157-169
Issue Date	2020-03-20
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77600">http://hdl.handle.net/2115/77600</a>
Type	bulletin (article)
File Information	09_157_169.pdf



[Instructions for use](#)

## 満洲語文語の従属節対格主語の照応機能について

山崎 雅人  
(大阪市立大学)

キーワード：満洲語文語、従属節対格主語、manggi 節、照応、「定」、「特定」

### 1. はじめに

早田(2011:9)は、満洲語文語<sup>1</sup>のmanggi《～後》で終わる節の従属節対格主語の機能に関して、蒙古語文語について述べた小沢(1997:41)を引いて、「従属節の対格主語は、主節の主格主語（や不定格主語）とは別のものを指す。これこそが対格主語の中心的機能に他ならないと思われる。」と述べている。

対格主語は manggi 節以外の従属節にも現れうるが、本稿は早田(2011)と同じく、manggi 節内の対格主語を考察対象とする。そして、この形式には、上記の見解に加えて、先行もしくは後続の文脈と照応する機能があることを主張する。それにより、発話者は当該名詞が「定」または「特定」の情報という意味を伝えることができると考える。この主張を実証するために、まず早田(2011)が挙げる manggi 節の例を検討する<sup>2</sup>。さらに二つの清代満文資料と共に 1989 年の現代錫伯文資料<sup>3</sup>にも範囲を広げ、この構文に関する上の主張を検証する。

本稿は、山崎(2018)及び山崎(2019)において、属格主語を持つ従属節の述部がその前後の文脈に関連する表現を持つことを論じたものに続いて、同様の現象を manggi 節内の対格主語の場合において分析するものである。

### 2. 早田(2011)の用例

早田(2011)が最初に引用する従属節対格主語の例は、上原(1960)がまず取り上げ、次いで津曲(2002)も言及している『満洲実録』の例で、前者では孤例として論じられている<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> 本稿の例文は、満洲語文語の形態素をピリオドで区切る。満洲語文語は日本語に近い語順を有し、その助詞のうち、主格はゼロ形態で、属格は-i で対格は be で表記され、ほかに与格 de、奪格 ci、位格 de、具格-i などの助詞がある。なお、属格と具格の助詞にハイフンを付けるのは、早田(1998)の表記法に従い助詞以外の同形表記と区別するためである。コンマの使い方は、原文で語を区切る記号がひとつだけか、ふたつ用いられているかに基づく。一部に不統一があるが、前者は日本語の読点に、後者は同じく句点に近い機能と考える。なお、使用したテキストには一部印字が不明瞭な箇所があるが、前後の文脈から推測できるものは、そのように注で述べる。

<sup>2</sup> 早田(2011)は、『満文原檔』『満文三國志』から 11 例をあげているが、本稿では、前者に関して『満文老檔』が対応する 9 例を考察対象とした。

<sup>3</sup> 『西遊記(錫伯文)』(上、中、下) 1989 年、新疆人民出版社)がどの程度シベ語話者に受容されたかは、時代状況からして一考の余地があるが、この時期に満洲語文語を用いて書き記されたものとしての資料的価値を認めることとする。

<sup>4</sup> 本稿の例文中では、manggi 節の対格主語とグロス及びその対訳部分を太字で表記する。なお、例(1)のグロスは本稿著者によるものである。

(1) genggiyen han tere gisun be daha.fi, cahar -i elcin kangkal baihū  
 英明 汗 その 言葉 (対) 従う.副動 チャハル (属) 使者 カンカル バイフ  
 -i emgi te.bu.he niyalma de bithe jafa.bu.fi, takūra.me, min.i elcin  
 (属) 共に 住む.使役.完了 者 (与) 書 持つ.使役.副動 遣わす.副動 私(属) 使者  
 be unggī.he de sin.i elcin kangkal baihū be unggī.re, min.i elcin  
 (対) 送る.完了 (与) あなた(属) 使者 カンカル バイフ (対) 送る.未完 私(属) 使者  
 be unggī.rakū o.ci, sin.i elcin be wa.mbi se.me inenggi  
 (対) 送る.否定 なる.仮定 あなた(属) 使者 (対) 殺す.不定 言う.副動 日  
 boljo.fi unggī.he, cahar -i linnan han tere elcin be  
 期日を定める.副動 送る.完了 チャハル (属) リンダン 汗 その 使い (対)  
 isi.na.ha manggi, manju gurun -i genggiyen han -i elcin be geli  
 及ぶ.行く.完了 後 満洲 国 (属) 英明 汗 (属) 使者 (対) また  
 unggī.rakū boljohon -i inenggi be dule.ke manggi, amargi monggo gurun  
 遣わす.否定 約束 (属) 日 (対) 過ぎる.完了 後 後の モンゴル 国  
 -i sunja tatan -i kalka.i bei.se.i elcin ji.fi, genggiyen han -i  
 (属) 五 部 (属) ハルハ(属) ベイレ.複(属) 使者 来る.副動 英明 汗 (属)  
 elcin be linnan han tu wece.me waha se.me ududu jergi  
 使者 (対) リンダン 汗 旗 祭る.副動 殺す.完了 言う.副動 何 度  
 alan.ji.re jakade, genggiyen han geli emu biya funce.me tuwa.fi,  
 告げに来る.未完 ので 英明 汗 また 一 月 余る.副動 見る.副動  
 bei.se amba.sa.i buru[sic] hendu.me, muse.i elcin be wa.ha  
 ベイレ.複数 大臣.複数(属) ~に向かい 述べる.副動 私たち(属) 使者 (対) 殺す.完了  
 inu o.mbi, 『満洲実録』巻六 今西(1992: 240-241)  
 当に なる.不定

「英明汗はその言葉に従って、チャハルの使者カンカル・バイフと共に留めた者に書簡を持たせて遣わして『我が使者を遣わした時に貴兄の使者のカンカル・バイフを遣わそう。我が使者を遣わさないなら、汝の使者を殺す』と言って、日程を決めて送った。チャハルのリンダン汗はその使者が到着した後、満洲国の英明汗の使者をまた遣わすことなく約束した日を過ぎてから、後のモンゴル国の五部にハルハのベイレたちの使者が来て、『英明汗の使いをチャハルのリンダン汗が旗を祭って殺した』と五六度告げるので、英明汗はまたひと月あまり見守って、ベイレら大臣等に向かって言うに『我らの使者を殺したことに当に間違いはない』」

この例では、英明汗とリンダン汗の間の使者のやり取りにおいて、使者の処遇がその後の対応を決定する判断材料となっていることを述べる文脈である。manggi 節中の対格主語 tere elcin 《その使者》は、前の文脈で kangkal baihū -i emgi tebuhe niyalma 《カンカル・バイフと共に留めた者》として言及されている。このように、manggi 節内で対格主語になっている名詞は、そこに先行する文脈ですでに一度現れていることから、聞き手(読み手)が特定できる「定(definite)」の表現となっている。

発話者にとって文脈上で主要な言及対象者を、主語でありながら無標の主格形ではなく対格形で示すことにより、言わば「発話上のコスト」をかけることで、読み手もしくは聞き手に「定」としての認識を促す機能がこの構文にあると考える。この例だけでなく後述の例でも見るように、対格主語となる語は指示詞を冠された名詞を始めとして固有名詞や一人称または二人称の代名詞が多い。これらは意味的に「定」もしくは「特定(specific)」となりうる情報である<sup>5</sup>。

この例に続いて、早田(2011)は『満文原檔』と『満文三国志』から 11 例をあげることで、上原の主張と異なり必ずしも例外的な構文ではないことを実証している。

それらの例で使われる従属節述語を見ると、以下の通りである。

bucehe 《死んだ》	三例
akū oho 《亡くなった》	二例
isinaha 《至った》	二例
jihe 《来た》	二例
dosika 《入った》	一例
iliha 《立った》	一例

後に見るように、『満文原檔』と『満文三国志』以外の文献でも、対格主語を持つ manggi 節の例はこれらの動詞を有している。いずれも自動詞であることが指摘できるが、この構文が自動詞に限られるのかは不明である。

以下では、例(2)から例(10)までが早田(2011)が挙げる例である。それらは『満文原檔』と『満文三国志』順治本からの用例であるが、本稿ではそれぞれ後代の『満文老檔』と『満文三国志』雍正本で対応する例を検討した。なお、早田(2011)があげる全 11 例のうち 2 例は、『満文原檔』の be が『満文老檔』で ba に改変されたものと削除されている例なので、本稿の検討対象からは除外する。内訳は、檔案からの 6 例と白話小説からの 3 例である。

(2) ineku juwan uyun de, mafuta emu gūsai juwe.te amban, karun -i juwan duin	同じ 十 九 (位) mafuta 一 旗(属) 二.分配 大臣 哨探 (属) 十 四
amban, gūsa.i amban karun be gaifi, mafuta tung yuwan pu hoton de	大臣 三十(属) 大臣 哨探 (対) 率いる.副動 mafuta 通 遠 堡 城 (位)
anafu te.ne.he, e.se.de enduringge han hese wasi.mbu.me henduhe	戍守 住む.行く.完了 これ.複数(与) 聖皇 帝 旨 下る.使役.副動 述べる.完了
gisun, suwe mafuta be isi.na.ha manggi, cooha tende.fi <sup>6</sup> wasihūn	言葉 あなた方(主) mafuta (対) 及ぶ.行く.完了 後 兵 分ける.副動 西方

<sup>5</sup> 会話で聞き手も知っていることが「定」である。英語で、先行文脈中の特定の語に照応して名詞に定冠詞が付いたり代名詞を使うことが、「定」の典型例である。他方、話し手が知っていることは「特定」とされる。庵(1994: 41, 50)参照。

<sup>6</sup> tendefi とあるが、意味から dendembi 《分ける》の副動詞形と解釈する。

songko faitame sio yan de isi.tala genefi, amasi mederi bitu.me  
 跡 探索する.副動 岫 巖 (位) 及ぶ.まで 行く.副動 後 海 縁をつける.副動  
 songko faita.me jeng giyang de acanju. 老檔VI p.1248  
 跡 探索する.副動 鎮 江 (位) 合流する.命令

「同じ十九日、Mafuta は各旗から二人ずつの大臣との哨探の十四人の大臣、計三十人の大臣と哨探を率いて通遠堡城に戍守に行った。これらの者に聖皇帝が旨を下して述べた言葉『汝等は Mafuta が到着すれば、兵を分けて西方に探索し、岫巖に至るまで行って、引き返して海沿いに探索して鎮江で合流せよ』」

従属節主語の mafuta に対格助詞が付き、その到来が次の行動の起点となる。その動作主である mafuta は、先行する文脈に現れている。この語は固有名詞であり、当該文脈において話し手が知る「特定」と見なされる。

(3) si jabdu.ci, ere biya.i orin -i onggolo gene, jabdu.rakū  
 あなた(主) 間に合う.仮定 この 月(属) 二十 (属) 前 行く.命令 間に合う.否定  
 o.ci, orin de juranu, sim.be bedere.me ji.he manggi, gebu  
 なる.仮定 二十 (位) 出発する.命令 あなた(対) 戻る.副動 来る.完了 後 名  
 bu.ki se.he; 老檔VI p.1134  
 与える.願望 言う.完了

『汝は間に合えば今月二十日前行け。間に合わなければ二十日に出発せよ。汝が帰還した後に称号を与えようと思う』と言った」

この例の従属節の主語は二人称代名詞単数対格形で、この動作主の帰還が発話者による褒賞という次の行動へとつながる、先行の動作となる。従属節述部の bedereme jihe 《戻って来た》の対格主語 simbe は、先行する文中の jabduci 《間に合えば》の主格主語 si を先行詞とする。二人称代名詞なので、この対話の聞き手にとっては「定」の表現である。

(4) niohon ihan aniya jakūn biya.i orin ilan de, damin be takūra.ha bithe.i gisun,  
 乙 丑 年 八 月(属) 二十 三 (位) damin (対) 遣わす.完了 書(属) 言葉  
 abai, babutai suwe.ni gene.he cooha be ningguta de isi.nji.ha manggi,  
 abai babutai あなた方(属) 行く.完了 兵 (対) ningguta (位) 及ぶ.来る.完了 後  
 ga.ji.re niyalma be asara.me isi.bu.re, teisule.me cooha be  
 取る.来る.未完 人 (対) 護送する.副動 及ぶ.使役.未完 相応する.副動 兵 (対)  
 suwe.ni beye ga.ji.me ji.o, tere.ci funce.he cooha be, gemu jakūn  
 あなた方(属) 自身 取る.来る.副動 来る.命令 それ(奪) 余る.完了 兵 (対) 皆 八  
 gūsa.i amba.sa de ada.bu.fi ningguta de weri, 老檔III p.986  
 旗(属) 大臣.複数 (与) 従う.使役.副動 ningguta (位) 留める.命令

「乙丑年八月二十三日に damin を遣わした書の言葉『汝等 Abai, Babutai の出征した兵が Ningguta に到着した後、連れて来る者を護送して至らせよう。それに相応した兵を汝等自身

で率いて来い。それから余った兵を皆八旗の大臣等に委ねて Ningguta に留めよ』

この例は、書簡の冒頭部分であるため先行する文はなく、照応する語は対格主語に後続する文中に現れる。使役する兵士を manggi 節では対格主語としており、その兵の性質に関しては、後続文脈で二度、teisuleme cooha 《ふさわしい兵》と funcehe cooha 《余った兵》と述べているので、「定」と判断される。

(5) han iogi gene.fi dzu fujiyang be ga.ji.me ji.he, tere jide.re  
 韓 遊撃 行く.副動 祖 副将 (対) 取る.来る.副動 来る.完了 彼 来る.未完  
 de, jirgalang taiji, yoto taiji, te.he ba.ci ili.ha, … bei.se dulimba.de  
 (位) jirgalang taiji yoto taiji 座る.完了 場所(奪) 立つ.完了 ベイレ.複数 中央(位)  
 te.he, fujiyang dzu k'o fa, iogi be ici ergi dalba.de hanci te.bu.he, tere  
 座る.完了 副将 祖 可法 遊撃 (対) 右側 傍らに 近く 座る.使役.完了 彼  
 be ji.he manggi, ši fujiyang, kūrcaŋ baksi, lungsi, ning ts'anjiyang be  
 (対) 来る.完了 後 石 副将 kūrcaŋ baksi lungsi 甯 参将 (対)  
 unggi.he, ši fujiyang dzu de aca.fi gisure.he, kūrcaŋ baksi, lungsi, ning  
 遣わす.完了 石 副将 祖 (与) 会う.副動 話す.完了 kūrcaŋ baksi lungsi 甯  
 ts'anjiyang, emu udu gucu be gai.fi, ulan -i gencehen de ili.ha, 老檔 V p.582  
 参将 一 幾つ 友 (対) 連れる.副動 壕 (属) 縁 (位) 立つ.完了

「韓遊撃は帰って祖副将を連れてやってきた。彼が来た時、Jirgalang Taiji、Yoto Taijiは座っているところから立ち上がり…諸王は中央に坐り、副将祖可法、韓遊撃を右側に坐らせた。彼が来たので、石副将、Kūrcaŋ Baksi、Lungsi、甯参将を遣わした。石副将は祖と会見して話し合い、Kūrcaŋ Baksi、Lungsi、甯参将は数人の僚友を連れて壕の縁に立っていた」

当該箇所の先行文脈では、dzu fujiyang 《祖副将》が韓遊撃に伴われて石副将を訪れたことに言及している。この従属節対格主語の tere 《彼》は、この場面で石副将の会見相手となるキーパーソンの祖副将を指すと考える。当該場面において、この重要人物は「定」なので、ここで対格形を用いたと考える。

(6) bi tuwa.ci, han dobi adali kenehunje.me tokto.bu.rakū bi.me, geli  
 私(主) 見る.仮定 汗 狐 ように 疑う.副動 定まる.使役.否定 ある.副動 また  
 mao dzung bing guwan be balai ofi, doigon.de emu mujilen be jafa.rakū  
 毛 総 兵 官 (対) 放恣 なる.副動 先(位) 一心 (対) つかむ.否定  
 o.fi, amala uša.bu.ha de ja akū se.re.de, tutu o.fi  
 なる.副動 後 牽く.受動.完了 (与) 容易 ない 言う.未完(位) そのようになる.副動  
 mao dzung bing guwan be ubaša.mbi se.me dorgideri yuwan dusy de  
 毛 総 兵 官 (対) 叛く.不定 言う.副動 こっそりと 袁 都堂 (与)  
 ala.fi wa.ha, … bi mao dzung bing guwan be buce.he manggi, geng  
 告げる.副動 殺す.完了 私(主) 毛 総 兵 官 (対) 死ぬ.完了 後 歌

ciyandzung ni emgi daha.ki se.re arga be hebde.he, 老檔IV pp.168-170

千 総 (属) 共に 投降する.願望 言う.未完 謀 (対) 謀る.完了

「我が見るところでは、Han は狐疑して定まらず、また毛総兵官も放恣で一定の方針がないので、後に巻き添えになると容易でないと思い、そこで毛総兵官が叛くと袁都堂に密告して彼を殺した。…我は**毛総兵官**が死んだ後、耿千総と共に投降しようと謀ったことがある」

当該従属節に先行する文脈では、始めに毛総兵官の性格について触れ、次いで彼が叛いた結果殺害された経緯が書かれている<sup>7</sup>。彼の死は、発話者が投降を試みた時期を画する手がかりであり、その死去という出来事の担い手である毛総兵官は、話し手にとって「特定」しうる固有名詞であり、対格主語とされたと考える。

(7) yuwan du ye, sakda han be akū o.ho manggi, bisi.re fon.de sain  
袁 都 爺 老 汗 (対) ない なる.完了 後 いる.未完 時(位) 良い  
mujilen -i du ming jung be jafa.fi wa.ha.kū, jai geli ning  
心 (具) 杜 明 忠 (対) 捕らえる.副動 殺す.完了.否定 更に また 寧  
yuwan -i hecen de bithe unggi.he doronggo se.me mim.be simiyan de  
遠 (属) 城 (与) 書 送る.完了 礼のある 言う.副動 私(対) 瀋陽 (位)  
hoošan deiji.me takūra.ha, 老檔IV p.19

紙銭 焼く.副動 遣わす.完了

「袁都爺は、**老 Han が**亡くなったので、在世中に好意をもって杜明忠を捕らえて殺さず、更にまた寧遠城に書き送ったのは礼のあることとして、我を瀋陽へ紙銭を焼きに遣わした」

主節主語の袁都爺が、対格助詞が付く sakda han のことを、殺人をせず礼儀ある振る舞いをしたと評価する発言である。従属節の sakda han be akū oho 《老 han が亡くなった》と直後の bisire fonde 《存命時は》が、死去した後の時点と生存していた過去という対立的な関係にあるとすると、後者の主語は明示されていないが直前の節と同じで、「(老 han が) 生きていた時には」という意味になる。manggi 節の外に同じ者を意味上の主語とする部分があるとしても、この例だけは本稿で扱う他の例と異なり、対格主語が指す者が当該箇所以外に明示的な言及を持たず、本稿の主張が該当しないものと考えられる。

以上が檔案からの用例で、例(7)を除くと、当該箇所の前または後ろの文脈に対格主語に該当する者が再度言及されており、それぞれの文脈で話し手または聞き手にとって同定可能となる「特定」や「定」の特徴を有する語として扱われていると考える。

以下の3例は、早田(2011)中の『満文三国志』からの用例である。

<sup>7</sup> これら二か所の mao dzung bing guwan は共に対格主語であるが、これは sembi を主節述語とする従属節内のものである。

(8) lio-biyoo hendu.me, te min.i nime.re.ngge fahūn de hada.habi, buya  
 劉表 述べる.副動 今 私(属) 病む.未完.動名 肝臓 (位) 居つく.過去 小  
 juse be mergen deo de afa.bu.ki min.i jui erdemu akū, geren  
 子.複数 (対) 賢 弟 (与) 遭う.使役.願望 私(属) 子 徳 ない 諸  
 amba.sa gemu samsi.mbi,, mim.be buce.he manggi, mergen deo  
 大臣.複数 皆 散り散りになる.不定 私(対) 死ぬ.完了 後 賢 弟  
 si jing-jeo -i weile be ali.ci o.mbi, hiowande besergen -i fejile  
 あなた(主) 荊州 (属) 事 (対) 受ける.仮定 なる.不定 玄 徳 枕 (属) 下  
 niyakūra.fi 第40回 第8巻 114a4-7  
 跪く.副動

「劉表が言う『わしはもはや肝臓に病が巣くっている。我が子を賢弟にお願いしたい。愚息は徳乏しく、諸臣は皆散り散りになるであろう。わしが死んだ後は汝が荊州のことを引き受ければよからう』玄德は枕元に跪き」

劉備が関羽・張飛と共に枕頭に立ち、劉表の遺言を聞く場面である。従属節主語が対格になっているのは、話し手自身の行く末を語る重要場面で、死にゆく己が抜き差しならぬ存在であることは論を俟たないからであろう。死を暗示する病を患っている話し手自身は、先行文脈で触れられている。

(9) fe banji.ha jurgan be ongo.fi, men.de yargiyan mejige  
 昔 生まれる.完了 恩 (対) 忘れる.副動 私たち(与) 真の 消息  
 ala.rakū.ngge, men.i eyun non be jobo.hoi buce.he manggi, ecike  
 告げる.否定.動名 私たち(属) 姉 妹 (対) 憤慨する.持続 死ぬ.完了 後 叔父  
 si bayan wesihun o.fi banji.ki se.re.ngge, waka.o,  
 あなた(主) 富 貴 なる.副動 暮らす.願望 言う.未完.動名 あらず.疑問  
 第26回 第6巻 17a6-b1

「昔の恩を忘れてわたくし共に本当のことを話してくれぬこととは。我ら姉妹が憤死した後、叔父上は富貴となって暮らそうと言うのではないのか」

一人称複数代名詞属格形 *meni* が同格で *eyun non* 《姉妹》に続き、それに対格接辞 *be* が付けられて *manggi* 節の主語となっている。同じ人々が、前の文では一人称複数代名詞与格形 *mende* で言及されている。

(10) siyan.ju, kung ming be ili.bu.fi, emu gala.i yasa.i muke fu.me, emu  
 先 主 孔 明 (対) 立つ.使役.副動 一 手(具) 目(属) 水 拭う.副動 一  
 gala.i kung ming ni gala be jafa.fi, hendu.me, bi te buce.mbi, mujilen  
 手(具) 孔 明 (属) 手 (対) 取る.副動 述べる.副動 私(主) 今 死ぬ.不定 心  
 niyaman -i emu gisun be ala.ra., … jui lu wang lio yung, liyang wang lio  
 腹 (属) 一言 告げる.未完 子 魯 王 劉 永 梁 王 劉



li be hula.fi hanci ga.ji.fi tacihya.me hendu.me, suwe  
 理 (対) 呼ぶ.副動 近く 取る.来る.副動 教える.副動 述べる.副動 あなた方(主)  
 min.i gisun be gemu eje, mim.be akū oho manggi, suwen.i  
 私(属) 言葉 (対) 皆覚える.命令 私(対) ない なる.完了 後 あなた方(属)  
 ahūn deo ilan niyalma gemu cengsiyang be ama -i gese weile, 第85回  
 兄 弟 三 人 皆 丞 相 (対) 父 (属) 如く 行う.命令  
 第17巻 116b1-3, 117a4-7

「先主は近侍の者に命じて孔明を助け起こさせ、一方の手で涙を押し拭いながら彼の手を取って『朕は死ぬ。最期にぜひとも申しておきたいことがある』…先主はふたたび孔明を座につかせ、魯王劉永・梁王劉理をさしまねいて『朕なき後、そなたたち兄弟三人は、丞相を父と思って使えよ。』」

上記例も例(8)と似て、発話者が自らの死について言葉を残す場面である。先と同じく、対格主語は死の担い手である発話者自身で、死にゆくことは *bi te bucembi* と例(8)よりあからさまに先立つ文脈で触れている。

これら三例は、一人称代名詞が対格主語になっているか、またはその属格形が対格主語の一部になっている。いずれも対話において聞き手に話しかけているので、「定」の表現と考える。

### 3. 『満文金瓶梅』『擇繙聊齋志異』『西遊記(錫伯文)』の用例

さらに、早田(2011)が扱っていない清代満文資料の『満文金瓶梅』と『擇繙聊齋志異』に加えて、現代語の『西遊記(錫伯文)』から、当該用法の事例を提示する。

(11)u-yuwei-niyang sebsi.ci aitu.rakū be sa.fi, golo.fi  
 呉 月 娘 抱き起す.仮定 蘇生する.否定 (対) 知る.副動 あわてる.副動  
 lai-hing be morila.bu.fi, duka.i tule si-men-king be boo.de ji.o  
 来 興 (対) 馬に乗る.使役.副動 城門(属) 外 西門 慶 (対) 家(位) 来る.命令  
 se.me gana.bu.ha, sun-siowei-o, si-men-king be boo.de ji.he  
 言う.副動 迎えに行く.使役.完了 孫 雪 娥 西門 慶 (対) 家(位) 来る.完了  
 manggi, moo be isi.fi fulehe be bai.me, beye de weile isi.bu.rahū  
 後 木 (対) 抜く.副動 根 (対) 求める.副動 自身 (与) 罪 及ぶ.使役.懸念  
 se.me, u-yuwei-niyang be sinda.rakū niyakūra.fi, in.i emgi jamara.ha  
 言う.副動 呉月 娘 (対) 放つ.否定 跪く.副動 彼女(属) 共に 喧嘩する.完了  
 be ume jondo.ro se.me bai.re de, 『満文金瓶梅』  
 (対) 禁止 思い出して語る.未完 言う.副動 求める.未完 (位)  
 第26回 32a9-b3

「呉月娘は抱き起しても息を吹き返さないと知って、あわてて来興を馬で遣って、城外に西門慶を迎えにやった。孫雪娥は、西門慶が帰って来て、根掘り葉掘り調べ上げ、自分に罪を

着せはしないかと心配して、呉月娘につきまとい、跪いてあの人と喧嘩したことを言わないでと求めると、」

先の文脈で来興が迎えに出た西門慶に触れた後、孫雪娥が内心の恐れを述べる文言においては、*manggi* 節の西門慶を対格主語としている。これは、自分を脅かす存在である主人西門慶の帰宅をきっかけに面倒なことが起こるのを予期する場面である。この小説の主人公である西門慶は「定」であると考える。

(12) *jing gisure.me bisi.re.de, han;<sup>8</sup>-doo-guwe ji.he, juwe nofi nene.he*  
 正しく話す.副動 いる.未完(与)韓 道 国 来る.完了 二 人 先んじる.完了  
*baita be emu jergi alafi hendu.me, bi amala yang-jeo de*  
 事 (対) 一 度 告げる.副動 述べる.副動 私(主) 後 揚 州 (位)  
*isi.na.ha manggi, aibi.de suwem.be bai.re,, han;-doo-guwe hendu.me,*  
 及ぶ.行く.完了 後 何ある(位) あなた方(対) 求める.未完 韓 道 国 述べる.副動  
*looye gisun mim.be ma-teo de isi.na.ha manggi, hūda aca.bu.me*  
 旦那 言葉 私(対) 波止場 (位) 及ぶ.行く.完了 後 商い 合う.使役.副動  
*gisure.me ging-gi wang-be-zu -i boo.de tata.na,* 『満文金瓶梅』第 51 回 18b6-19a1  
 語る.副動 経 紀 王 伯 儒 (属) 家(位) 泊まる.命令

「ちょうど話しているところへ韓道国が来た。両人は先の事をひとしきり告げて言う『私はいづれ揚州に着いたら、あんたたちがどこにいるか捜すことにしましょう』韓道国が言う『旦那のお言葉では、**私**が波止場に着いたら、仲買の王伯儒の宿屋に泊まれてってことでしたよ』」

はじめの発話者の言う *suwembe* 《あんたたち》は韓道国らのことであり、それに対し韓道国自身の返答では「私は」と対格主語 *mimbe* を用いている。ここで話し手自身を指す一人称代名詞には先立つ会話の中で、対話相手が二人称代名詞を用いて言及している<sup>9</sup>。話し手の韓道国は、聞き手の来保にとって「定」の存在である。

(13) *emu inenggi bedere.fi eniye.i baru hendu.me tacikū.i dorgi*  
 一 日 戻る.副動 母(属) ～に向かい 述べる.副動 塾(属) 内  
*sunja ninggun ju.se, gemu cen.i ama.ta de ji.ha bai.fi efen uda.fi*  
 五 六 子.複数 皆 彼ら(属) 父.複数 (与) 銭 求める.副動 餅 買う.副動  
*je.mbi, min.i teile ama akū.ngge ainu, eniye hendu.me si*  
 食べる.不定 私(属) だけ 父 ない.動名 なぜ 母 述べる.副動 あなた(主)

<sup>8</sup> 原文で *n* の脇に点があるものをこのように表記する。

<sup>9</sup> この例の前半の *manggi* 節を含む発話では、来保は主格形 *bi* を用いている。従属節主格主語と他の格との機能面の比較は、別稿で述べることとする。

haharda.ha erin be aliya.fi, jai sin.de ala.kini, … emu inenggi  
 成人になる.完了 時 (対) 待つ.副動 再度 あなた(与) 告げる.願望 一日  
 eniye.i baru hendu.me, seibeni mim.be etuhun amba o.ho manggi,  
 母(属) ~に向かい 述べる.副動 昔 私(対) 強い 大きい なる.完了 後  
 min.i ama-i bi.sire ba.be ala.mbi se.mbihe, te o.mbi.dere, 『擇繡聊齋志異』  
 私(属) 父 (属) いる.未完 所(対) 告げる.不定 言う.回想 今 なる.不定.終助  
 第8巻 2b1-4, 3a7-3b2

「ある日、帰って来て母に言う『塾のうち五六人の子らはお父さんにお金をもらって餅を買って食べてたよ。どうして僕だけお父さんがいないんだろう』と。母が言った『あなたが大きくなったら教えてあげますよ』…ある日、母に向かって言う「昔、僕が大きくなったらお父さんのいるところを教えてやると言ったでしょ。もうなりましたよね」

発話者が成人に達することが、以前になされた父の所在を知らせる約束を成就させる条件であることから、発話者本人にとって大事な場面であることが分かる。対格主語 mimbe となっている者を先行文脈において対話者が二人称代名詞で指していることは、前掲の例(12)と同じ関係で、聞き手には「定」の表現である。

(14) bagiyei hendu.me, muse tere nai nai be ji.he manggi, uttu  
 八 戒 述べる.副動 私たち(主) 彼 母親 (対) 来る.完了 後 このように  
 teliye.fi je.mbi se.me jobo.mbihe, dule ji.he.ngge nai nai waka,  
 蒸す.副動 食べる.不定 言う.副動 憂える.回想 元来 来る.完了.動名 母親 非ず  
 fe jaka ni,, 『西遊記 (錫伯文)』第34回 538頁 2-3, 6-7  
 古い もの 終助

「八戒が言う『俺らは、彼の母親がやって来たら、こんな風に蒸して食われるかと思っていた。なんだ、来たのは母親じゃなくて、例の奴なんだ』

この例は、来ることが予期されている者の中で、来たのは結局誰であったかを述べる発話である。それは恐れていた母親ではなかったことが、後続の文脈で触れられていると考える。nai nai 《母親》は普通名詞なので「不特定」にもなりうるが、例(1)と同じくここでは指示詞 tere 《彼の》が付くことで「特定」と見なせる。例(4)と同様に、後から出てくる nai nai に照応している。

(15) hing je hendu.me, si mim.be taka.mbi.o, ya looye se.me  
 行 者 述べる.副動 あなた(主) 私(対) 見知る.不定.疑問 どの人 爺 言う.副動  
 tutu niyakūra.mbi, tere hūwašan hendu.me, bi sim.be taka.mbi,  
 そのように 跪く.不定 その 和尚 述べる.副動 私(主) あなた(対) 見知る.不定  
 ci tiyan dai šeng sun looye waka.o,, be dobori dari amga.ha tolgin  
 齊 天 大 聖 孫 老爺 非ず.疑問 私たち(主) 夜 毎に 眠る.完了 夢

de, sim.be kemuni aca.ha,, dai begin sing kemuni ji.fi, tolgin de  
 (位) あなた(対) 常に 会う.完了 太白金星 常に 来る.副動 夢 (位)  
 hendu.me, sim.be ji.he manggi, men.i ergen teni baha.mbi  
 述べる.副動 あなた(対) 来る.完了 後 私たち(属) 命 今しがた 得る.不定  
 se.he bi.he,, enenggi baha.fi tuwa.ci, wesihun -i cira, tolgin de  
 言う.完了 ある.完了 今日 得る.副動 見る.仮定 貴 (属) 顔 夢 (位)  
 aca.ha looye ci majige encu akū,, jabšan de enenggi baha.fi  
 会う.完了 老爺 (尊) 少し 異なる なし 幸い (位) 今日 得る.副動  
 ji.he.ngge, ambula kesi, 『西遊記 (錫伯文)』 第 44 回 714 頁 9-13  
 来る.完了.動名 大いに 恩

「悟空がいぶかって言う『おまえさん、俺を知っているかね。どの長老様と言ってそんなに跪くのかね』その和尚が言う『存じていますよ。齊天大聖の孫さまでしょう。私たちは、毎晩夢であなた様にお会いしていたのです。太白金星がしょっちゅう来られ、夢の中で言われるにあなた様がお出でになったら、はじめて私たちは命を得る、とおっしゃいます。今日お顔を拝することがかないまして、夢でお会いした長老様と寸分の違いもありません。幸いにも今日来ることができ、本当にありがたいことです』

二人称代名詞の対格主語が指すものは、その前の文脈で当人であることが確認された齊天大聖の孫悟空である。ここでは夢で予言されていたその到来を確認することが、発話者にとって文字通り死活的に重要な行為となっている。聞き手を指す二人称代名詞で「定」と考える。

#### 4. おわりに

これまでに見た例の中で、従属節対格主語の前に主節主語がある形式が半数ある。すなわち、例文(1), (2), (6), (7), (11), (12)と(14)である。形態的に異なることで、ふたつの主語を認識し分けやすくなると考えられる。

本研究は、久保(1981)を嚆矢とする、この言語の従属節主語研究の一環である。本稿では、早田(2011)があげた 11 例のうちの 9 例について、明示的に示されていない例(7)以外の全ての例で対格主語が指す対象がその前後の文脈でも言及されていることを確認することができた。また、この用法の存在を早田(2011)が扱っていない三資料においても、確認することができた。これらの実証作業によって、本稿冒頭の manggi 節内の対格主語は照応関係にある語を持つという主張の有効性をほぼ確かめることができたと考える。

今後は、その機能に関する仮説を様々な従属文の形式に従って分類し、山崎(2015)が扱った他のアルタイ諸語や朝鮮語、日本語の対格主語構文においても追究したいと考える。

## 謝辞

本稿の掲載にあたり、二名の匿名査読者からの有益な指示により改稿できたことを感謝します。また、論文掲載の決定を下された編集者にも感謝します。なお、本稿の責任はすべて著者が負うものです。

## 略号

(主)：主格、(属)：属格、(对)：对格、(与)：与格、(位)：位格、(具)：具格、(奪)：奪格  
副動：副動詞、未完：未完了、動名：動名詞、終助：終助詞

## 参考文献

- 早田輝洋訳註(1998)『満文金瓶梅訳注 序一第十回』東京：第一書房  
早田輝洋(2011)「満洲語における対格主語」『九州大学言語学論集』32, 203-214  
今西春秋(1992)『満和蒙和 (対)訳 満洲實録』東京：刀水書房  
庵功雄(1994)「定性に関する一考察：定情報という概念について」『現代日本語研究』1: 40-56  
久保智之(1981)「満洲語文語の従(属)文の主語がとる助詞 i および be について」『九大言語学研究室報告』2, 46-50.  
小沢重男(1997)『蒙古語文語文法講義』東京：大学書林  
津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20 講』東京：大学書林  
上原久(1960)『満文満洲實録の研究』東京：不昧堂  
山崎雅人(2015)「アルタイ諸語、朝鮮語、日本語の従属節対格主語の機能について」『日本語学会第 150 回大会予稿集』50-55.  
———(2018)「満洲語文語の従属節属格主語の機能について」『北方言語研究』8: 127-146  
———(2019)「満洲語文語における従属節属格主語に関連する文脈について」『北方言語研究』9: 161-175

## 資料

- CHIN P'ING MEI, 1975, San Francisco: Chinese Materials Center Inc.  
LIAO CHAI CHIH I, 1975, San Francisco: Chinese Materials Center Inc.  
ILAN-GURUN-I BITHE, 1979, San Francisco: Chinese Materials Center Inc.  
『満文老檔』満文老檔研究会訳註(1955-1963)、東洋文庫  
《西游记(锡伯文)》(上、中、下)1989年、新疆人民出版社  
齊煙・汝梅校點《新刻繡像批評 金瓶梅》曾校本、1990年、三聯書店有限公司、香港  
小野忍・千田九一訳『金瓶梅』1980年、平凡社  
増田渉・松枝茂夫・常石茂訳『聊齋志異』1980年、平凡社  
太田辰夫・鳥居久靖訳『西遊記』1972年、平凡社

## The Anaphoric Function of the Accusative Subject in Subordinate Clauses of Written Manchu

Masato YAMAZAKI  
(Osaka City University)

Hayata (2011) demonstrates that there are eleven examples of accusative subjects in the clause ending with *manggi* “after” in the Written Manchu literature of the early Qing dynasty, and concludes that the subordinate accusative subject has an agent which is different from the subject in the main clause. The present paper argues that accusative subjects in a clause ending with *manggi* have the function of anaphora in contexts where entities considered to be in an anaphoric relationship are referred to in context before or after sentences with the accusative subject. This is illustrated not only in the examples in Hayata (2011) but also those of three Written Manchu novels, including “*The Tale of Monkey* ‘Sibe Translation’” (『西遊記 (錫伯文)』) published in 1989.

In the following example, the word *simbe*, which is the second person singular accusative pronoun, works as a subject of the verb *jihe* (‘come’ in the perfect) in the *manggi*-clause.

○*si jabduci, ere biyai orin -i onggolo gene, jabdurakū oci, orin de juranu, simbe* (acc.) *bedereme jihe manggi, gebu buki sehe*; “He said ‘if you are in time for departure, depart before the 20th, but if not, depart on the 20th. After you return, I would like to give you a name.’” The entity in an anaphoric relationship designated by the second person pronoun stands as the nominative subject *si* in the previous context.

The following example is a conversation between the speaker and his mother, who promised to tell the speaker about his missing father when he grows up.

○*si hahardaha erin be aliyafi, jai sinde alakini, ... emu inenggi eniyei baru hendume, seibeni mimbe* (acc.) *etuhun amba oho manggi, mini ama -i bisire babe alambi sembihe, te ombidere*, “‘I’ll wait for a time when you grow up and I will let you know.’ ... One day, he said to his mother, ‘Previously you said to me, ‘After you grow up to be strong and tall, I will let you know where your dad is’, didn’t you? Now I have grown up, haven’t I?’”

The word *mimbe* is the first person singular accusative pronoun and this is the subject of the verb *oho* (‘become’ in the perfect) in the *manggi*-clause. The first sentence refers to the speaker as the second person singular nominative pronoun *si* ‘you’ from his interlocutor’s point of view. It is obvious that there is an anaphoric correlation between the two pronouns, which mean the same person.

(やまざき・まさと yamazaki@lit.osaka-cu.ac.jp)